

## 1. 略歴

1983年3月	東京大学文学部美学芸術学専修課程卒業
1983年4月	同大学院総合文化研究科比較文学比較文化専門課程修士課程入学
1985年3月	同修士課程修了
1985年4月	同博士課程進学
1989年3月	同博士課程単位取得退学
1989年4月	和洋女子大学文家政学部英文学科専任講師
1994年4月	和洋女子大学文家政学部英文学科助教授
1998年4月	和洋女子大学人文学部国際社会学科助教授
2003年4月	和洋女子大学人文学部国際社会学科教授
2008年4月	和洋女子大学人文学群日本文学・文化学類教授
2015年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

## 2. 主な研究活動

### a 専門分野

分析哲学、美学

### b 研究課題

フィクションの存在論の研究から出発し、虚構文の論理構造の解明から論理学の「可能世界」概念の応用へ、そして「可能世界」概念そのものの論理の研究へと進んだ。その過程で、自然科学の「多世界」「多宇宙」の概念と「可能世界」との関係の考察を迫られ、それらの概念に立脚した「人間原理」を方法的基盤とした諸議論の中で哲学問題を再構成する仕事を進めた。現在は、芸術の現状に対して人間原理的（進化論的）な説明を与え、見かけの法則性を観測選択効果へ還元する論理を追求している。

### c 概要と自己評価

哲学問題を人間原理の観点から考察し直す仕事については、心の哲学、ロボット科学、人文死生学といった分野の研究者と研究会を重ねる中で、着実に思索が進みつつある。人間原理の観測選択効果の論理構造を多くの領域に見出す作業とともに、長年の研究テーマであるフィクション論の人間原理的再構成を進めつつある。それでも、いくつかの下位カテゴリについては試論的な論考を発表できており、現在、サブカルチャーにおける例外的な実験芸術的試み（具体的には、アニメにおけるコンセプチュアルアートの実験）の事例を分析することから、人間原理的フィクション論の端緒を掴みつつあるところである。

新しい研究課題として、分析哲学的美学の中で中心問題となっている「芸術の定義」を、広くカテゴリ論の中で捉えなおす仕事に着手した。そのケーススタディとして、上記アニメの実験的事例の中から、人間原理を直接扱ったアニメ作品『涼宮ハルヒの憂鬱』の特異な演出を、カテゴリ変換のもとで再解釈する仕事を上梓した。その延長上において、「カテゴリ違和」という概念装置を提唱し、コンセプチュアルアート（非芸術から芸術への越境）、死生学（生から死への越境）、トランスジェンダリズム（性別の越境）を成立させる必要十分条件の構造的対応を探る試みを進めている。2018年度中の予定としては、10月の美学会第69回全国大会、11月の質的心理学会第15回大会、および『哲学雑誌』第132巻第804号／第133巻第805号合冊の三箇所において、それぞれカテゴリ違和研究の暫定的成果を発表する。また、涼宮ハルヒ研究の続報を春秋社ウェブマガジンにて連載で発表してゆく形で、研究の恒常的な更新を図る。

なお、専門研究と並行してクリティカルシンキングの単行書を啓蒙目的で発信してきたが、2019年1月頃に、『心理パラドクス』（二見書房、2004年刊）の改訂版を文庫本（二見文庫）で出版する予定である。

### d 主要業績

#### (1) 著書

単著、『論理パラドクス 論証力を磨く99問』二見文庫、246p、2016.9

外国語訳、『天才児のための論理思考入門』台湾版（中国語繁体字版）『如何教出有邏輯力的孩子』（人類智庫數位科技股份有限公司）余亮閻訳、169p、2017.1

単著、『改訂版 可能世界の哲学 「存在」と「自己」を考える』二見文庫、302p、2017.4

単著、『論理パラドクス・勝ち残り編 議論力を鍛える88問』二見文庫、254p、2017.11

共編著、渡辺恒夫、三浦俊彦、新山喜嗣 編『人文死生学宣言——私の死の謎』春秋社、(執筆箇所:「第7章 一人称の死——渡辺、重久、新山への批判」pp.189-219、「論理記号と条件付確率の式(ベイズの定理)について」pp.220-223)、2017.11

単著、『エンドレスエイトの驚愕——ハルヒ@人間原理を考える』春秋社、424p、2018.1

## (2) 論文

三浦俊彦、「物語的理想化の諸相——数学と文学」『美学芸術学研究』、第33/34号、pp.201-49、2017.1

Toshihiko Miura, “The Narrative Fallacy of Probability” JTLA (Journal of the Faculty of Letters, The University of Tokyo, Aesthetics), Vol.40/41 (2015/16) pp.49-59、2017.4

三浦俊彦、「芸術の統一理論に向けた「再帰的定義」の可能性——C. L. スティーブンスンのモデルから」『美学芸術学研究』第35号、pp.207-22、2017.7

## (3) 学会発表、講演記録

国内、三浦俊彦、「芸術の統一理論に向けた「再帰的定義」の可能性——C. L. スティーブンスンのモデルから——」第67回美学学会全国大会、同志社大学、2016.10.8

国内、三浦俊彦、「フィクションとシミュレーション」第124回(平成28年秋季)東京大学公開講座 東京大学本郷キャンパス、安田講堂、2016.10.29

国内、三浦俊彦、「文系の反論理・理系の非論理」第90回五月祭 公開講座、東京大学本郷キャンパス、2017.5.21

国際、Shoji Nagataki, Masayoshi Shibata, Tatsuya Kashiwabata, Takashi Hashimoto, Takeshi Konno, Hideki Ohira, Toshihiko Miura, Shinichi Kubota “Robot as Moral Agent: A Philosophical and Empirical Approach” 39th Annual Meeting of the Cognitive Science Society, Poster Session 3, Space 126, London、2017.7.29

国内、三浦俊彦、「偶然の論理学:可能世界と主観確率」朝日講座「〈偶然〉という回路」第3回 東京大学本郷キャンパス、2017.10.11

国内、三浦俊彦、「コンセプトチュアルアート視のための諸条件——「エンドレスエイト」の場合(「作品の美学」哲学会第56回研究発表大会 倉田剛、貫成人と 東京大学本郷キャンパス)、2017.10.29

## (4) その他

「偏態パズル」連載『総合文学ウェブ情報誌 文学金魚』、2016.4~2017.2 <http://gold-fish-press.com/archives/46299>

「文学金魚大学校セミナー ジャンルの越境」対談・遠藤徹と、日仏芸術文化協会 2016.6.18 (第1回 文学金魚大学校セミナー ①『わたしたちの小説作法』三浦俊彦&遠藤徹) <http://gold-fish-press.com/archives/40976> 2016.7.12

「個性と共生の哲学:ロボットと人間の共生社会へ向けて」哲学ディスカッションカフェ、橋本敬、久保田進一、柏端達也、大平英樹、柴田正良、小松孝徳、長滝祥司と MatchingHUBKANAZAWA、ANA クラウンプラザホテル 金沢、2016.11.1

「今年の執筆予定」『出版ニュース』2017年1月上・中旬号p.56、2017.1、2018年1月上・中旬号、p.44、2018.1

「神視界の人間の彩色 ベイズの定理」『現代思想』2017年3月臨時増刊号「総特集=知のトップランナー50人の美しいセオリー」pp.196-9、2017.2

「反戦という文化の営みかた」[巻頭言]『比較文学研究』第102号 pp.1-5、2017.2

「加藤流全体論——自分の駒も相手の駒もない」『ユリイカ』7月号 pp.136-145、2017.6

「思想は宇宙を目指せるか」(対談・稲葉振一郎と)『現代思想』7月号 pp.64-79、2017.6

『うんこ漢字ドリル』で考える悲しき“うんこ的”ミソジニー『サイゾー』9月号 pp.78-81、2017.8

「ループする時間」とアニメ作品の悲哀(鹿目凛と)『サイゾー』10月号 pp.120-7、2017.9

## 3. 主な社会活動

### (1) 学会

国内、日本科学哲学会『科学哲学』、編集委員、2016.4~

国内、美学会、委員、2016.10 ~

国内、科学基礎論学会、応用哲学会、東大比較文学会、会員、2016.4~